

# 鯨 研 通 信



第435号

2007年9月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町4番5号 豊海振興ビル5F  
 電話 03(3536)6521(代表) ファックス 03(3536)6522 E-mail://webmaster@icrwhale.org HOMEPAGE http://www.icrwhale.org

## 目次

南極海で撒き散らされる暴力と、嘘と、環境汚染 .....	石川 創 1
日本鯨類研究所が進めている調査手法の紹介 ( ).....	大谷誠司 9
日本鯨類研究所関連トピックス (2007年6月~8月).....	18
日本鯨類研究所関連出版物等 (2007年6月~8月).....	18
京きな魚 (編集後記).....	20

## 南極海で撒き散らされる暴力と、嘘と、環境汚染

石川 創 (日本鯨類研究所・調査部)

### はじめに

政治的団体が自らの主義主張を達成するために暴力的手段を用いることをテロリズムと称する。長じて環境問題や動物の権利を理由にこの種の活動を行うことをエコテロリズム、もしくは環境テロリズムと呼ぶ。エコテロリズムの語源は新しく、インターネット百科事典のウィキペディアによれば、ラムサール条約で有名になったワイズユース(「環境の賢明な利用」と訳される)運動の父と言われるロン・アーノルドが使い始めたらしいとのことだが、作家のCWニコルが「エコ・テロリスト」という小説を1991年に出版しているので、案外こちらの方が早いかもしれない(小説そのものは1975年に執筆されたという)。

米国FBIのリストにも載る有名なエコテロリスト団体としては、実験動物施設や毛皮専門店などを襲撃する動物解放戦線(ALF)や地球解放戦線(ELF)等が知られるが、水産資源の持続的活用を目指して鯨の調査を行っている我々にとっては、捕鯨あるいは鯨の捕殺に反対するがために、合法的な科学調査ですら暴力で妨害する動物愛護団体や環境保護団体が、まさにエコテロリストに他ならない。オランダに本拠地を置くグリーンピース及び米国のシーシェパード・コンサベーションソサイアティ(以下シーシェパード)は、過激さの程度に差はあれ、暴力的手段により調査船団の船舶と乗組員の命を危険にさらしている点で変わるところはない。

本文は、シーシェパード及びグリーンピースという2団体によって南極海で繰り返し行われる暴力的な妨害行動の実態と、それに伴い彼らが撒き散らす数々の「嘘」、そして環境保護を看板にしている彼らの行動が南極海に与えている悪しき面について報告するものである。筆者は(財)日本鯨類研究所が1987/88年より毎年実施している南極海鯨類捕獲調査にこれまで12回参加し、このうち4回で調査団長として船団の指揮を執った。本報告で述べている内容のほとんどが、自分自身の経験及び当事者に直接確認した事実関係に基づいている事をあらかじめお断りしておく。

## 1 . 暴力

### シーシェパードの調査船団襲撃

シーシェパードは、グリーンピースの創設メンバーの一人、ポール・ワトソンが1977年に創設した団体である。グリーンピースよりもさらに過激な暴力活動を行う狂信的とも言える反捕鯨団体で、過去にアイスランドやノルウェー等の捕鯨船を何隻も沈めている。昨年度（2005/06年）の日本の南極海鯨類捕獲調査においては、グリーンピースとともに調査船団を攻撃し、調査母船日新丸のスクリューを狙ってワイヤーを投げ込んだり、所属船の舷側に取り付けた「缶切り（カン・オープナー）」と称する鋼鉄製の刃物で補給船のタンカーの船腹を破ろうとして外板に傷をつけたりする破壊活動を行った（石川 2006）。

今年度（2006/07年）の南極海鯨類捕獲調査に対しても、シーシェパードは早い時期から妨害活動を行うことを公言しており、前年度の妨害に用いたファーレイモワット号（657トン）を12月にオーストラリアから出港させた他、新たに購入したロバートハンター号（1017トン）を1月にチリから出港させ、南極海で調査船団の探索を行った。シーシェパードは、調査船団の位置情報に25000ドルの賞金をかけるなどして南極海で調査船団の探索を行い、2月9日には調査母船日新丸（8030トン）、2月12日には目視専門船海幸丸（860トン）を襲撃した。

### 日新丸への攻撃

シーシェパードによる2月9日の襲撃は05：20（現地時間）頃から始まり、まず速力の勝るロバートハンター号が日新丸の左舷数メートルまで異常接近し、酪酸と思われる悪臭を放つ薬品の入ったガラス瓶の投擲（写真1）、発煙弾の投擲、日新丸のスクリューへの絡まりを狙ったロープや廃網の曳航と投下（写真2）等を行った他、救命索の発射銃を日新丸めがけて撃ち込んだ（写真3）。06：00頃にはファーレイモワット号も現れ、同号から発進した大型ゴムボート2隻も、ロバートハンター号と同様にロープや廃網を日新丸のスクリューを狙って繰り返し投下した。一連の攻撃で、日新丸では甲板部乗組員2名が、投げ込まれた薬品を浴び左目と顔面に化学熱傷を負った。

日新丸は、08：00頃には船速の遅いファーレイモワット号を引き離すことが出来たが、ロバートハンター号とボートは日新丸に対して執拗に攻撃を続けた。しかしながら、同船は11：30頃突然反転して日新丸から離れ、その後まもなく日新丸に対し「メーデーメーデー（国際救難信号）、乗組員が海中転落した。救助を要請する。」旨連絡してきた。調査団は、暴力行為を受けた相手ではあったが、人道的観点及びシーマンシップに則り、遭難者の捜索への協力を開始した。その後15：00に、ファーレイモワット号が遭難者を発見し、日新丸に対し「救助活動に感謝する」旨連絡してきたが、信じがたい事にこの連絡後に再び攻撃を宣言し、ロバートハンター号とともに日新丸に接近してきた。幸いな事に海況が悪化したため、日新丸は両船の追跡を振り切って難を逃れた。

### 海幸丸への攻撃

海幸丸は目視専門船として船団とは離れた場所で調査中であつたが、2月12日11：45（現地時間）に同船に接近して来る不審な船を発見した。不審船がロバートハンター号と判明したため、海幸丸は調査を中断して避航に入ったが、速力に勝るロバートハンター号は降下させた大型ボートとともに海幸丸を追撃し、ボートから海幸丸のスクリューを狙って網とロープを執拗に投下した（写真4）。このうちの少なくとも1本はスクリューに絡み、海幸丸は一時航行が困難となった。このため14：37に海幸丸は、衛星通信で海賊に攻撃された際の救難信号（PIRACY ATTACK）を発信した。しかしロバートハンター号は無抵抗で避航する海幸丸に左舷から異常接近し、発煙弾を多数甲板に投げ込みながら激しく体当たりして、海幸丸の船体を大きく損傷させた（写真5、6）。さらに遅れて来たファーレイモワット号も加わり、左舷側からファーレイモワット号、右舷側からロバートハンター号が挟み込む形で海幸丸を強制的に停船させた（写真7）。海幸丸が停船中も、ロバートハンター号は発煙弾を投げ込み続け、船尾にも体当たりを行った。執拗な攻

撃は17:00頃まで続いたが、本海域の救難活動を担当しているニュージーランド当局（RCCNZ）がシーシェパード側に連絡を取った後に、ようやく攻撃は中断された。その後すでに燃料が乏しかったシーシェパードの2隻は海幸丸から離れ、南極海からメルボルンに向かった。

### グリーンピースは何をしたか

グリーンピースは前年の2005/06年には南極海にエスペランサ号とアークティックサンライズ号の2隻を繰り出し、調査船団に対して大型ボートやヘリコプターによる激しい妨害活動を展開したあげくに、アークティックサンライズ号を日新丸に衝突させた（石川 2006）。しかし2006/07年の調査では、1月下旬にエスペランサ号がニュージーランドを出港して南極海に向かったものの、結果から言うと妨害活動をしなかった、と言うより出来なかった。なぜならば彼らが調査船団を発見する前に日新丸が2月15日に不幸な火災事故を起こし、調査が中断してしまったからである。

攻撃対象を失ったグリーンピースは、急速捕鯨問題を南極の環境問題にすり替えた。火災を起こした日新丸から大量の油が流出し、南極生態系に大災害を起こす危険があると宣伝し、環境を守るために直ちにエスペランサ号が日新丸を曳航して行く必要があると主張したのだ。火災発生により調査船団の位置をつかんだエスペランサ号は、ただちに現場に急行し、「救助」と「曳航」を申し出た。

洋上での両者のやりとりは比較的紳士的に行われたが、これには説明が必要であろう。そもそも調査船団は、前年に彼らから受けた暴力的な妨害もさることながら、1998年にも日新丸が火災を起こして船団がニューカレドニアに緊急入港した際に、グリーンピース活動家達によりスクリューに鎖を巻かれるなどの非常識な妨害活動を受けている。今回の「救助申し出」も額面通りに受け止めるには不信感が拭いきれなかったのは事実である。しかしいかに相手がグリーンピースとは言え、火災発生時に日新丸が発した救難信号に応じた「救助申し出」をむげに断るわけにはいかない。日新丸側はエスペランサ号に、火災損傷の区域は限られており、環境汚染の心配はない、自力修復できる可能性が高い、曳航するにしても船団の僚船及び補給用のタンカーがいるので問題ない、として曳航については辞退し、復旧活動の妨げにならないよう自船に近づかないことを求めた上で、周囲の氷縁情報の収集などを依頼した。

エスペランサ号は約束を守るかに見えたが、復旧作業の真最中に通告なしにヘリコプターと船を接近させ、「ENOUGH IS ENOUGH」（もうたくさんだ）と書かれた横断幕を広げて宣伝用の撮影を行い、事故で仲間を失った日新丸乗組員の神経を逆撫でした。日新丸は火災発生から10日後に自力航行が可能となり、船団僚船とともに帰路についたが、シーシェパードの襲撃に続く火災事故の復旧に疲れ果てた調査船乗組員達こそ、グリーンピースに言いたかったはずだ。「もうたくさんだ」と。

### 暴力を擁護する人々

シーシェパードの行為は妨害などと言うより襲撃と言うにふさわしい。彼らはグリーンピースが妨害対象としない目視専門船（すなわち非致命的調査を行う船）もお構いなしに攻撃し、しかも発煙弾や薬品などの「武器」を平気で使用する。自分より小さな船に対して最初から体当たりを仕掛け、船舶の安全や人命などお構いなしである。

しかし驚くべきはシーシェパードの非常識な暴力行為だけではない。真に恐るべきことは、彼らを擁護し、支持する国や人々が多数存在することである。オーストラリアの港湾都市フリーマントルは、2006年7月にシーシェパードのファーレイモワット号を母港として喜んで迎え入れた。シーシェパードは同国内で調査船団襲撃のための募金活動を開始し、彼らのために国内有数のビール会社を始めとして多数のスポンサーがついた。オーストラリアは以前から、グリーンピースは無論のこと、シーシェパードとも親密な国である。同国の環境大臣は、何かにつけ日本の南極海鯨類捕獲調査を公然と非難するだけでなく、シーシェパード代表のポール・ワトソンに激励の電話をかけ、緊急時に自国の南極基地を使わせる旨の発言すらしている。しかしファーレイモワット号は2006年12月の出港直後にベリーズの船籍を取り消され、調査船団を襲撃した時点で、船籍の無い「無国籍船」であった。すなわちいかなる国の官警でもこの船を臨検し、海賊行為があれば拿捕できる状態にあったはずだが、海幸丸の襲撃後2007年2月にオーストラリア

に戻った同号は、何ら咎め立ても受けずにメルボルン港に堂々と入港している。ちなみに僚船のロバートハンター号もまたメルボルン入港直前に英国籍を抹消されたが、こちらも摘発された様子は全くない。

オーストラリア同様に強烈な反捕鯨国であるニュージーランドもまた、官民挙げてグリーンピースやシーシェパードを擁護する国で、調査船団妨害のためにやって来たグリーンピースのエスペランサ号がオークランド港に寄港した際には、環境大臣がわざわざ激励に出かける歓迎ぶりである。新聞報道によれば、シーシェパードに襲撃された海幸丸が救難信号を発した後、同環境大臣がファーレイモワット号に直接電話をかけて以後の妨害停止を約束させたという。一見理性ある行動ともとれるが、同海域の救助活動を管轄するRCCNZや海軍が出動してシーシェパードを逮捕する代わりに、大臣自ら彼らに電話をかけるという親密ぶりの方が、被害を受けた我々にしてみれば疑わしい事おびたしい。ただ、ニュージーランドはグリーンピースに対するほどにはシーシェパードを応援する気はないらしく、同国空軍機が2007年1月に捕獲調査船団を発見した際には、その映像をメディアに公表したものの、船団を探し回っていたシーシェパードに対して位置情報の提供を拒否したとされる。

オーストラリアもニュージーランドも、日本とは観光や貿易、文化交流等において緊密な関係がある。しかし両国の妨害団体への親密な態度や、日本の鯨類捕獲調査に対する一方的な批判と侮辱を見聞するたびに、筆者はそのギャップに暗澹たる気分になる。国家間にどんなに親密な関係があっても、「譲れないところは譲れない」という態度は確かに外交として正しいだろう。しかし、ある国の政策がたまたま捕鯨反対の立場であるがために、反捕鯨団体による明らかな犯罪、明らかな暴力を擁護する理由にならないのは、法治国家として最低の約束事であろう。

また外交という点から見れば、筆者はこれらの国々の政治家達の無分別な発言や行動に対し、我が国がほとんどメッセージを発信していない点が残念でならない。外務省は妨害団体の度重なる無法行為を放置する国に対し、在外公館を通じて時々抗議を行って来ているようだが、当事者たる我々には残念ながら効果は今一つ見えない。ましてや日本国民は、南極海でどれほどの暴力が撒き散らされているかについてはおろか、妨害団体が言っていることと、我々が言っていることとのどちらが正しいかすら、ほとんど知る機会がないのが現実である。この2年にわたるグリーンピースやシーシェパードの危険な行動に関しては、何人かの国会議員の方が強い憤りを表明し、調査船団の安全確保の必要性を指摘してくれた。しかし日本の政治家の方々には、それだけではなく、あたかも我々が違法行為を行っているかのような態度を隠さない他国の政治家達に対し、公の場でもっとはっきりと物申していただきたいと切に願う。度重なる暴力的な妨害の中、船上の我々の耳に入るのは環境テロリスト達を擁護する外国政治家の報道ばかりである。事実上孤立無援の南極海で、調査船団の乗組員達が、日本政府の毅然とした態度をどれほど待ち望んでいるかを知っていただきたいと思うのである。

## 2 . 撒き散らされる嘘

近年ではインターネットの普及により、南極海における妨害団体の活動は彼ら自身の手でほぼリアルタイムで世界中に配信されるようになった。オーストラリアやニュージーランドのメディアは過熱気味とも言えるほど熱心に報道するが、日本も含め北半球の国々ではあまり記事を見ることはない。おそらくその理由のひとつは、彼らからの発信情報に嘘が多すぎるからであると考えて間違いないだろう。

筆者は拙著「グリーンピースと動物福祉」(石川 2006)で、グリーンピースがいかにも事実を歪曲した情報発信を行うかについていくつか例証した。その最たる例は2005/06年調査におけるアークティックサンライズ号と日新丸の衝突事故であろう。グリーンピースジャパン(以下GPジャパン)は、2006年1月8日(衝突当日である)付で自身のウェブサイト、グリーンピース側から撮られた衝突映像とともに「捕鯨母船日新丸が当て逃げ」との記事を載せた。興味深いのは、配信されている動画に流れている音声警告を「グリーンピース船長による警告」とわざわざ説明していたことだ。注意深く聞けばわかるはずだが、グリーンピースの映像に録音されていたのは、日新丸のスピーカーからエンドレスで流れているグリーンピースに向けた英語の警告である。内容は「警告、警告、こちらは日新丸船長、ただちに妨害活動を止めて船か

ら離れなさい、さもなければ放水を行います」というものだ。同記事のこの部分は最近になって書き換えられて無くなっているが、1年以上にわたって間違った説明が放置された理由も、訂正の記載も無いところを見ると、やはり故意に事実を歪曲した記述であったのかと言わざるを得ない。ちなみに同年6月16日に、GPジャパンはこの衝突事故に関してグリーンピース側の正当性を主張する文書を発信しているが、日新丸側が衝突時の映像を複数公開していることに関し、あたかも衝突を予期して事前にカメラマンを配置したかのような書きぶりである。当たり前である。我々は長年の経験から自船の近くにグリーンピースが一人でもいる限り、必ず複数のカメラを動員して記録を撮っている。それはまさにこのような暴力的な妨害行為の発生時に、グリーンピース側が発信する操作された情報の嘘を暴くために他ならない。この記事を書くにあたって、改めてグリーンピース側の映像を見ても、タンカーを左舷におく日新丸が、右舷真横から突っ込んで来るアークティックサンライズ号を避けられないことは明らかである。6月16日付GPジャパンの解説によれば、「日新丸が舷側でアークティックサンライズ号を押したことによって衝突が生じた」（原文まま）とあるが、15年前から日新丸で調査に従事している筆者は、未だに8000tの日新丸が、タグボートよろしく真横に走る姿を見たことがない。

GPジャパンに関してはまだまだ面白い話がある。GPジャパンは2006/07年調査で日新丸が火災事故に見舞われた際に、エスプランサ号による日新丸の曳航を環境省に申し出るとして2月16日に記者会見を行った。この中でGPジャパンは、「日本鯨類研究所はグリーンピースからの曳航要請に対して『テロリストからの救援は必要ない』とコメントして、グリーンピースからの援助を断っている」（原文まま）と批判した。同日午後になって複数の新聞社から「本当か？」との確認の電話が日鯨研にかかって来たが、当方にはなんの話かさっぱり判らない。前述したように、かような申し出があれば断りたいのは山々だが、日新丸側から救難信号を発した以上、相手が誰であれ救助の申し出をむげに断るわけにはいかない。そのために、日新丸も洋上では紳士的な対応に徹していたはずだ。自分の知らぬ間に所内で誰かがグリーンピースの要請を断ったのかと事実関係を確認しているうち、夕方（16:02）になってGPジャパンから日鯨研に1枚のFAXが届いた。水産庁長官、日鯨研理事長、共同船舶（日新丸の船主）社長宛で、「火災捕鯨母船の曳航の申し入れ」と書いてある。くだんの記者会見終了から2時間は経過していただろうか。つまりGPジャパンは日鯨研に「要請」をする以前に、すでに彼らの期待する「返答」を自前で語っていた訳だ。このお粗末な自作自演には腹が立つ前に笑ってしまったが、記者会見での発言は未だに訂正されないままだ。ちなみに後から調べてみると、彼らの言う「日鯨研の返答」の情報源は、本家のGPインターナショナルのウェブサイトに乗った記事であった節がある。当のGPインターナショナルの英文記事は、しばらく後になると「日鯨研」の部分が水産庁の捕鯨班長名に書き直されていた。しかし捕鯨班長ご本人に直接お聞きしてみたところ、やはりGPインターナショナルから水産庁宛にそのような申し出はなかったとの事である。

いずれにしても、一連のGPジャパンの嘘（いや「間違い」と言うべきか）は、どうもGPインターナショナルの垂れ流す情報を検証もせずに鵜呑みにしている事に原因があるようにも見える。GPジャパンには、もし彼らが日本支部として日本人に真実を訴えたいというのであれば、もう少し自分の頭でものを考え、自分の目でものを見て発言をして欲しいものだ。

グリーンピースと比べて、シーシェパードの嘘はもっと壮大である。シーシェパードのウェブサイトによれば、彼らは国連世界自然憲章（UN World Charter for Nature）に基づき、環境を守る国際法（国際捕鯨取締条約、南極条約、CITES等を挙げている）を破る日本の違法捕鯨を止めさせるのだという。自称国連公認の環境警察とでも言いたそうで、こんな与太話を信じる馬鹿がいるものかと思っていたが、調査船団を襲撃したシーシェパードの船に罽縵の海賊旗とともに国連旗が翻っている（写真8）のを見ると、笑い事では済まされない。しかもインターネットのブログなどを拾い読みしていると、「（シーシェパードの活動は）密漁を取り締まっているのだから許されるのではないか」などとの書き込みが見られ、日本人でも彼らの言い分を信じている人々がいるようなので、やはり間違いは訂正しておかなければならない。彼らは国連から何らかの委託を受けたのでもなければ、ましてや法の執行機関でもない。国際法を守る者が調査船を襲撃して体当たりをする事はあり得ない。彼らは鯨を守るとの口実で暴力を撒き散らす私設愚連隊である。日本が南極で行っている鯨類捕獲調査は、世界自然憲章にも南極条約にもCITESにも抵触しな

い。国際海洋法条約は公海における科学調査の自由を保障しており、鯨類捕獲調査は国際捕鯨取締条約第8条に基づく正当な調査なのだ。

### 3 . 深刻な環境汚染

シーシェパードは環境保護団体を名乗って、違法な漁業や海の環境汚染を許さないと叫んでいるが、その活動が環境破壊そのものである事は意外に知られていない。調査船団襲撃時に投げ込まれた薬品や発煙弾の多くは狙いがはずれて海没したが、彼らが投げ込んだ酪酸は、WHO等による国際化学物質安全性カード(ICSC)によれば、人体への有害性の他に「この物質を環境中に放出してはならない」「水生生物に毒性がある」と明記されている。また、彼らは船のスクリューを狙いワイヤーや漁網をさかんに投げ込んだが、その多くを回収せずに捨て去った(写真9)。南極条約の遵守云々と言う彼らが南極海で薬品を撒き、漁網やワイヤーを捨てて環境汚染を撒き散らしているのだ。これは南極海へのゴミ投棄を厳しく禁じた国際条約(マルポール条約)にも当然の事ながら違反している。ましてや船を体当たりさせるような暴挙で、万が一燃油の流出や船の沈没という結果になったら、乗組員に対してだけでなく南極海にどのような災害を引き起こすかは、子供でもわかりそうなものだ。

ではグリーンピースは南極環境に十分配慮しているのか?これも甚だ怪しいものだ。グリーンピースは大型のボートを多数繰り出して目視調査や捕獲活動を激しく妨害するが、これらのボートは活動中にしばしば浸水したり、時には転覆したりすることもある。写真(10)は、2006年1月14日にグリーンピースのボートが採集船の捕獲活動を激しく妨害した後、海面に残った油膜である。船外機メーカーによると、ボートのエンジンが水をかぶったり転覆したりすると、ある程度の燃料の流出は避けられないそうである。調査妨害のために重油燃料の大型船2隻をはるばる南極海まで繰り出すだけでなく、長期間にわたり10隻近いエンジンボートを走らせて大騒ぎをしたあげくの成果は海面に残された油膜というわけだ。また、2005/06年調査では洋上でボートからタンカーの船腹に大きな落書きをしたが、海面に垂れ落ちるペンキにはまったく無頓着なようだ。それぞれの事例は小さな事かもしれない。しかし南極環境保護を振りかざしながら、自らの行いに無頓着な態度は、グリーンピースもシーシェパードと変わるところがない。過去に南極海洋上で何度も船の衝突事故を起こしている危険については言わずもがなである。

ところでグリーンピースは、日本の調査船団が洋上でタンカーから燃料補給を受けている事を「南極環境に対して極めて危険である」としばしば激しく非難している。しかしグリーンピース自身が妨害活動の真最中に洋上補給をした事実にはあまり触れたくないようだ。2006年1月16日付の南アフリカの小さな海事記事に、「オレンジムンド号の南極冒険」というタイトルで、南アフリカの小型タンカーがグリーンピースのアーケティックサンライズ号とエスペランサ号補給のために南緯60度を超えた(南極海に入った)との記載がある(Young 2006)。この記事によれば、オレンジムンド号は「ユニコーン船舶社で最も古くて小さい2000tのミニタンカーで、極海を航行する設計ではない」そうで、ナミビアと南アフリカの沿岸を航海するために建造された喫水の浅いこの船にとって、暴風圏を越えて南極海を往復するのは、30年の船歴中で初めての無寄港最長航海であったと冒険譚を述べている。いやはやグリーンピースはずいぶん危ない船を南極海に呼び寄せたものである。なんのために?もちろん、洋上で燃料補給をする危険な日本の調査船団を妨害して南極海を守るためである。彼らは自分達が行っている欺瞞を認めようとしない。

### 4 . おわりに - なぜ南極海なのか

グリーンピースとシーシェパードという二つの「環境保護」団体の危険な行動と、日頃の崇高な主張との間に矛盾する事例を挙げていると枚挙にいとまがない。両者に共通する点のひとつに、ここ数年の彼らの洋上における反捕鯨妨害活動が、日本の南極海における捕獲調査のみに集中している事がある。グリーンピースは1999年にノルウェー近海で商業捕鯨妨害活動をしたが、その後はアイスランドの捕獲調査も含めて南極海以外で「直接行動」をしていない。シーシェパードは、2007年にアイスランドの捕鯨を阻止す

ると大宣伝したが、実際は現場にすら行かなかった。

GPジャパンの最近の発言（読売2007/4/26）によれば、彼らは捕鯨に反対しているのではなく南極海の調査捕鯨に反対しているのだという。南極の調査のみに反対で沿岸捕鯨であれば否定しないという方針は、筆者の知る限りグリーンピースのまったく新しい主張で、本家のGPインターナショナルにはそのような主張が見られない（その証拠にノルウェーやアイスランドの沿岸捕鯨を非難している）。本家に盲目的に従うかに見えるGPジャパンが単独でそのような主張をしているとすれば面白いが、南極の調査のみ反対という主張にはあまり説得力がない。

筆者が想像するに、彼らが南極海のみで妨害活動をする理由は少なくとも四つある。第一に、南極海は公海ゆえに捕鯨国の警察や沿岸警備隊に逮捕される心配がない。グリーンピースが1999年に行ったノルウェー捕鯨の妨害では、強力な沿岸警備隊にたちまち船ごと拿捕された経緯がある（石川 1999）。第二に、南極周辺国がニュージーランドとオーストラリアという強烈な反捕鯨国であるため、前述のごとく官民挙げて彼らを支援してくれるし寄付金も集めやすい。第三に、人々から隔離された南極海ではメディアも含めて第三者の目がほとんど周囲にないため、何をやっても自分達に都合良く宣伝できる。第四に（これはあまり考えたくないが）、同じ捕鯨国でも欧州の盟友であるノルウェーやアイスランドより、日本という極東の国のみを悪玉にしたほうが、欧米人の反感を煽りやすく金も集まりやすい、といったところであろう。

筆者の友人の中には捕鯨に反対する者もいるし、動物愛護団体に所属する者もいる。当たり前なことだが、個人であれ団体であれ、理由は様々だろうが、捕鯨に反対するも賛成するもまったく自由である。友人同士お互いの意見を尊重しつつ、それぞれの主張を議論する事が出来れば、それは知的な楽しみですらある。ただ、それぞれの意見を主張しようとする時に、事実をねじまげて人を欺いたり、ましてや暴力的な手法を用いたりするとなれば話はまったく別である。筆者はたまたま捕鯨を推進する側に属する人間であるが、少なくとも南極海における調査の妨害活動は、もはや捕鯨問題とはまったく無関係の問題として扱われるべきだと強く言いたい。肝腎なのは捕鯨に賛成か反対かではなく、暴力を許すか許さないのか、の一点である。筆者は捕獲調査の長い経験の中で何度も彼らと対峙してきたが、南極海で毎度のように繰り返される暴力的な妨害活動と世界中に撒き散らされる嘘には、心底辟易した。

2006/07年調査において効果的な妨害活動ができなかったグリーンピースは、調査船団の後を追ってエスペランサ号を日本に入港させキャンペーンを張ろうと目論んだが、これには全日本海員組合が猛然と反発し、入港を阻止するべく日本政府や港湾当局宛に要望書を提出した。GPジャパンはこれを「人権侵害」だとして、一部の国会議員らも巻き込んで抗議の記者会見などを行ったようだが、彼らは自分たちの行為が誰に批判されているかを考えて見ようもしない。怒っているのは船乗り達である。彼らはグリーンピースが捕鯨（あるいは南極海の調査？）に反対するから怒っているのではない。航海と乗組員の安全を脅かすグリーンピースの行為に怒っているのだ。

GPジャパン代表は、欧米人のお仕着せではなく日本人自らが国民に訴え、世論を動かして日本の捕鯨政策を見直そうと言う（星川 2007）。その考え方はまことに結構である。もし国民の大多数が真に捕鯨に反対を唱えるのであれば、日本の捕獲調査も商業捕鯨もいずれは終了するであろう。しかしその言葉に偽りがないのであれば、また本当に彼らの言う「非暴力的抗議活動」を実践するのであれば、南極海での危険な妨害活動と派手なパフォーマンスを即刻止めさせて、まずはマハトマ・ガンジー以来の非暴力的抗議の基本に戻り、ハンガーストライキでも行って支持者を集めてはいかがだろうか。

## 5 . 参考文献

- 石川創 2006 . グリーンピースと動物福祉 - 環境保護団体は南極海で人と鯨に何をしたか - . 鯨研通信431 .  
Young, R. 2006. [http://ports.co.za/didyouknow/article\\_2006\\_01\\_16\\_5018.html](http://ports.co.za/didyouknow/article_2006_01_16_5018.html)  
石川創 1999 . ノルウェー捕鯨事情 . 水産週報1504 .  
星川淳 2007. 日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか . 幻冬舎 .



写真1 . 甲板上に投げ込まれた酪酸と思われる悪臭を放つ薬品の入ったガラス瓶。ラベルにDANGER (危険)、TOXIC (毒物)などの文字が見える。



写真2 . 日新丸のスクリューを狙いロープと網を曳航しながら日新丸の舳先を回り込むロバートハンター号。



写真3 . ロバートハンター号は日新丸の左舷数mに近づき、薬品や発煙弾を投げ込むと共に、救命索発射銃を撃ち込んだ(写真左下の発射煙)



写真4 . ポートからロープや廃網を流すシーシェパード。南極海上でその多くは投棄されたままだ。

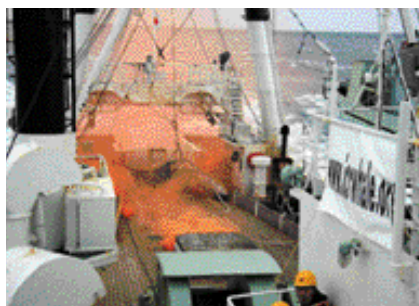


写真5 . ロバートハンター号(右)から海幸丸に投げ込まれた発煙弾。



写真6 . 海幸丸左舷に突っ込んでくるロバートハンター号。直後に衝突した。

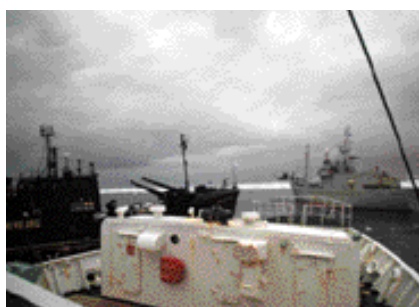


写真7 . 左舷からファーリーモワット号、右舷から前方に回り込んだロバートハンター号に挟まれて海幸丸は強制的に停船させられた。



写真8 . ロバートハンター号のマストに翻る国連旗。舳先の海賊旗(写真6)の方が彼らの行為をまだ正直に示している。



写真9 . シーシェパードが投棄した漁網(写真4参照)。彼らが糾弾しているはずの流し網と同様に、南極海の動物を無差別に殺す事になるかもしれない。

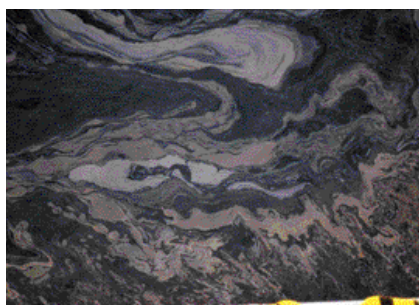


写真10 . これは調査船が排出した油ではない。グリーンピースのボートによる妨害活動の後に残された海面の油膜である。



# 日本鯨類研究所が進めている調査手法の紹介（ ）

## - クジラを測る -

大谷誠司（日本鯨類研究所・調査部）

### 1．はじめに

財団法人日本鯨類研究所（以下、日鯨研）が実施している捕獲調査では、南極海鯨類捕獲調査（JARPA）が始まった1987年から一貫して捕獲した全ての鯨について、生物調査を実施しています。今回は、その生物調査の中でも「測る」調査で使われている機材や大型機器及び測定方法について紹介します。これまで連載されてきた「日本鯨類研究所が進めている調査手法の紹介」シリーズでは、採集したサンプルをどのように使うかについて書かれたものでした。しかし、調査母船「日新丸」の甲板上で行っている生物調査について、詳しく解説されたことがなかったため、どのような測器を使って、どのように行われているのか、今回は生物調査の中でも「測る」ことに焦点を当てて紹介したいと思います。

クジラのことを図鑑や本で調べると、種ごとの体長や体重について真っ先に書かれているのを目にしたいと思います。陸上生活をしている哺乳類なら、体長や体重の測定も容易にできそうですが、もともと水中に生息する動物である鯨類では事情は変わってきます。水中で計測することもできないので、我々が計測しやすい陸上や船上に持ってくる必要があります。小型のイルカ程度なら、人が抱えて計測することもできるのでしょうが、大型のクジラの体長計測や体重測定を行うことは、物理的にも非常に難しくなります。では、ヒゲクジラのような大きなクジラの体長や体重はいったいどのようにして計測されているのでしょうか？

これまで日鯨研が行った捕獲調査で採集された鯨は、南極海ではクロミンククジラ、矮小型（ドワーフ）ミンククジラ、ナガスクジラ、北太平洋ではミンククジラ、ニタリクジラ、イワシクジラ、マッコウクジラの計6種1亜種になり、これらの鯨体を船の甲板上に上げ、船上で体長や体重を計測しています。一言でクジラの体長や体重を「測る」と言っても、対象が非常に大きく、それだけで技術的な困難が付きまといまます。ましてや狭い船上でそれを行うことは、技術的な問題以外にも、怪我や事故に対する十分な配慮が必要になります。

捕獲調査においては、体長や体重以外にも、種々の「測る」調査が行われており、本報ではそのような大型のクジラを調査する際に、我々が使用している機器について、またそれらを使った実際の測定方法について紹介します。

### 2．クジラの長さを測る

動物の大きさは、一般に「体長」という言葉で表わされていますが、どこからどこまでが体長として測定されているのでしょうか？ 実のところ全ての動物で同じ部位が測定されているわけではありません。例えば、尾のある陸上の哺乳類などは、吻端から尾の根元までの長さである頭胴長のことを一般的に体長と呼んでいます。クジラもれっきとした哺乳類ですが、その体形が陸上哺乳類とは著しく異なるため、同様の部位を体長とは呼んでいません。クジラの体長は、上顎先端から尾鰭の分岐点までの体軸に平行な直線

距離を意味します。

イルカのような小型鯨類の場合は計測も比較的容易に行えますが、大型ヒゲクジラやマッコウクジラになると、この体長も測り方次第で計測値自体に大きな誤差が出てしまうことがあります。このような事態を避けるため、国際捕鯨取締条約（ICRW）の附表「V. 監督及び取締り」に、クジラの体長計測方法について明記しています。これによれば「上顎の先端より尾鰭の分岐点までの体軸に平行な直線距離」と定義されているため、日鯨研でもこの計測点に準じ「体長」を計測しています。

ここでは簡単に「体長を計測する」と書いていますが、クジラの大体の大きさを想像してみてください。これまでに日鯨研が行ってきた捕獲調査では、ナガスクジラでは最大体長21.15m、クロミンククジラでも最大体長10.22mの記録があります。ヒゲクジラの実物を見たことのない人には、数字だけではその大きさがピンと来ないかもしれませんが、町中を走っている路線バスの長さがだいたい110mなので、クロミンククジラの大きいものはバス1台分、ナガスクジラではバス2台分ほどの長さになります。これほど大きなものを計測するためには、何を使うのでしょうか？ 附表には「伸縮性のない材料で作られた巻き尺で測らねばならない」と記されているため、20mあるいは30mのスチールメジャーを使用し、測定しています。

このスチールメジャーを鯨の体軸と平行に、一定の高さと張力で張って、上顎先端から尾鰭分岐点間の体軸（これが計測基準になります）に沿った直線長を体長として計測しています。クジラの尾ビレは体に対して垂直に付いているため、正確に体長を測定するには、本来ならクジラを腹這いにさせた状態で計測するのですが、これまでの調査ではほとんど全てが左体側面を上面として計測されてきたので（図1）、捕獲調査の体長計測値は、左体側を上にしたクジラの上顎先端から尾鰭分岐点までの直線距離と言うことになります。しかし、ナガスクジラやイワシクジラのような大型鯨については、調査母船の甲板は自由に鯨体の向きを変えられる程広くないため、クジラが甲板に上がって来た状態、つまり、右体側面を上面として計測することもあるのです。

この体長計測は全鯨種全個体で行っていますが、マッコウクジラの場合は少し計測点が変わります。マッコウクジラを見たことのある方はご存知かと思いますが、マッコウクジラでは上顎先端よりも頭部の先端の方が前方にあります（図2）。そのためマッコウクジラの体長については、「頭部の最先端から尾鰭の分岐点までの直線距離」と定義されており、捕獲調査でもこれに従って計測しています。

ちなみに、体長計測単位は商業捕鯨時代にはフィート単位または10cm単位で国際捕鯨委員会へ報告されてきましたが、捕獲調査では1cm単位での計測を行うことで、更に子細な解析のための情報を収集しています。

さらに、クジラの体形の特徴を計測によって数値化するために、体長の他にも特徴的な外部形態（プロポジション）を計測しています。この計測部位は、1920年代にイギリスが大型ヒゲクジラ類で初めて行った調査結果を記録したDISCOVERY REPORTSで用いられている測定部位に基づいていますが、系群間の差異をより検証しうるデータを得る、という目的に応じて、鯨種によって異なる部位を計測しています（図3）。このプロポジション計測のほとんどは、体長計測と同じ機材を用いていますが、これらの計測に用いるスチールメジャーを固定するためのスタンドや計測点にあてる計測棒などは、改良を重ねた結果、図4のようなものに落ち着いています。

DISCOVERY REPORTSでは計測は5cm単位で行っていますが、データの精度を上げるため、捕獲調査では1cm単位で行っています。

体長や外部形態の一部は、このような機器を用いて計測することができますが、それ以外のプロポジション計測には

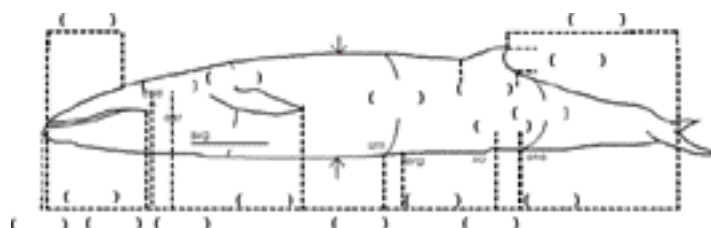


図3．現在の捕獲調査におけるプロポジション測定部位の一例（図はナガスクジラ用）。

異なる道具を用いています。背鰭の基底長や高さは、折り尺を用いて0.1cm単位で、胴周（胴体の周囲長）などの曲線距離は、直接テープメジャーを該当部にあてて計測し、体高のような予め決められた2点間の直線距離計測には大型ノギスを利用して計測しています。当初、大型ノギスはテープメジャーを貼り付けて自作した木製でしたが、その材質が木であることから、長年の使用で歪みが生じ、正確な値が得られなくなったため、現在では特注のFRP製の大型ノギスを使用しています。このFRP製ノギスは最長4mまで継ぎ足しが可能なため、現場でのノギスの利用範囲も広がりました。

その他に長さを測る調査項目として、口蓋長やヒゲ板列の長さ、頭骨長と頭骨幅（マッコウクジラの場合は頭骨高も）、子宮角幅、胎児体長があります。口蓋長は、頭解剖が始まる前の上顎の裏面が上を向いている状態で、その短径と長径をテープメジャーを使って1cm単位で計測します（図5）。ヒゲ板列長は、ヒゲ板列を上口蓋から切り離して甲板上でテープメジャーを使って計測しています（図6）。現在では、口蓋長とヒゲ板列長は、ミンククジラ、ニタリクジラ、イワシクジラ、ナガスクジラの4種で計測しています。頭骨長は、首の骨と頭骨の付け根の部分にあたる後頭顆の後端と前上顎骨前端の最短距離を、頭骨幅はその最大幅部を大型ノギス（ナガスクジラの場合、頭骨長が4mを越えてしまい、大型ノギスで計測できないため、体長計測で用いた機器）を使って0.1cm単位で計測しています（図7）。

子宮角幅の計測はメス個体のみで行いますが、鯨類の子宮はヒトのものとは少し異なり、Y字型をした子宮を持っています。これが二本の角のように見えるため、双角子宮と呼ばれ、左右それぞれの角の部分を子宮角と呼びます。妊娠した場合は通常、左右どちらか一方の子宮角で胎児を育てます（双子の場合、左右どちらの子宮角にも胎児が入っていることがあります）。我々は子宮角の幅を左右どちらもノギスを使って計測していますが、子宮角内の胎児の有無や、胎児の大きさによってその幅がかなり異なるため、サイズに応じたノギスを用いて0.1cm単位で計測しています。実際のところ、子宮内に胎児がいる場合、子宮角幅の計測を行うまでがかなり大変な作業になります。体長が3mを超えるような胎児が子宮内に入っている場合などは、子宮角の幅が100cm以上あることもあり、さらに胎児、羊水、子宮をあわせるとその重量は1t近くにもなるためです。まず子宮を体外に引き出して、計測できる状態にするまでが大仕事になります（図8）。胎児についても「長さ」の計測は成体とほぼ同様に行っており、体長とプロポジション計測を行っています（図9）。これらの計測は、ノギスなどを用いて0.1cm単位で計測していますが、4mを超えるような大型の胎児では、大型ノギスでも計測ができないため、成体と同じ機器を使って1cm単位で計測を行います。また、我々が微小胎児と呼んでいる10cm以下の非常に小さい胎児（図9）においては、湾曲した体を矯正することもできないため、体長計測及びプロポジション計測は行わず、体が曲がった状態で頭尾長のみを直接計測しています。

クジラの測定は、大きくて長いものばかりと想像されるかもしれませんが、折り尺を使ってミリ単位の計測も行っています。このような調査として、肥満度の指標となる脂皮の厚さの計測（図10）、メス個体の成熟の指標となる乳腺の幅と厚さの計測（図11）があります。脂皮厚の計測は、筋膜を基点として表皮の内側までを計測します。計測部位は、クロミンククジラでは2箇所、ナガスクジラでは14箇所など、鯨種によって異なります。過去にクロミンククジラでも、14箇所の部位を計測していましたが、部位によっては計測者間の誤差が大きく、データとして利用しづらい等の理由から、第二期南極海鯨類捕獲調査（JARPA II）になってからは計測箇所を絞り込みました。この決定はJARPAで捕獲されたクロミンククジラの豊富なデータから示されたものなので、他の鯨種についても、今後データが蓄積されれば、計測箇所の再検討がなされることもあると思います。

調査員は、ナイフや手鉤、ピンセットなどの採集道具の他に、記録用紙と共にテープメジャーや折り尺などの計測道具を作業カバンに入れて腰に付け、常に甲板上を持ち歩き、解剖の流れにあわせてそれぞれの計測作業を逐次行います。

以上が生物調査で行っている「長さ」の計測の紹介ですが、一口に「長さ」を測ると言っても、このよ

うに多種多様な計測が船上では行われています。

### 3 . クジラの重さを測る

1988/89年からの捕獲調査では、捕獲個体全頭の体重計測も行ってきました。クジラの全重量の計測は、日本の捕獲調査が始まって、初めて行うようになったもので、大型クジラをまるのまま巨大な体重計に載せて、体重計測を行っています。現在、体重計測のために30 t秤を使用しています（図12）。これは甲板上に設置した大きな特製の秤量台（12×4m）にクジラを載せて、上から吊って計量するものです。この秤量台自体の重量が7 t強あるため、秤量の上限は安全を見て22 tとしています。DISCOVERY REPORTSの時代にも、もちろん計測したいという願いはあったでしょうが、大きさなど物理的な問題もあり、断念したのではないかと思います。そこで、当時はクジラの部位ごとの重量を個別に計測し、それらを合計して得た数値を体重として記録していました。捕獲調査以前の体重データも、この方法で算出したものですが、解剖時の体液の流出などがあるため、多くの場合、実際の数値よりも低い値ではないかと推察されます。実は捕獲調査でも、体重の計測とは別にこの各部位ごとの重量（組織重量）を計測し、各組織の重量データも検閲と呼んで収集していますが、原則として1日に1頭のみ実施しています。ちなみに、検閲方法と一頭そのままの体重を比較してみると、それぞれの鯨種や個体でやや違いはあるものの、検閲から求められた体重は体重計で計測したものより平均で4・8 %程低い値が得られており、体重の6 %をヒゲクジラの体液損失量として計算した、他の研究と近い値を示しています。

捕獲調査では、クジラをまるのまま体重計に載せてその重量を計測すると先述しましたが、近年の捕獲対象鯨の大型化により、この30 t秤でもクジラの体重を計測することが困難になってきています。ミンククジラやクロミンククジラの体重は、重くても13 tを越えることがないため、この秤で計測するには全く問題はないのですが、イワシクジラやニタリクジラ、マッコウクジラでは、最大秤量以上の個体も捕獲されるため事情が変わってきます。その場合は、体重計で計測可能な重量になるまで解剖を進め（体重計測前に脂皮や背肉などを取り去ってから、残りの部分の体重を計測する）、体重計で重量計測できなかったものを足しあわせて体重を求めるという方法を用いています（通称、部分検閲）。また、近年捕獲が開始された、より大型のナガスクジラでは、そもそも鯨体が秤量台の上に載りきらないため、この方法でも到底計測できません。そこで、上述した検閲方法を用いて体重を推定しています。このように捕獲調査では、鯨体の重量に応じて主に三つの手法を用いて船上で体重の計測を行っています。

では、実際に調査で捕獲しているクジラの体重はどれくらいあるのでしょうか？クロミンククジラで最大12.6 t、ナガスクジラは上述の検閲で求めた値ですが、最大で約65 tでした。動物園でよく目にするインドゾウを例にとると、大きいゾウでだいたい5～6 tですから、ヒゲクジラの中で小型といえどもクロミンククジラの大きいものではインドゾウ2頭分の重さがあるのです。

こんな重いものを測るには、たとえ陸上でも一定の設備が必要となります。陸上では貨物やトラックなどの重量物を測定するためのトラックスケールという大きな台秤があり、第二期北西太平洋鯨類捕獲調査（JARPN II）の沿岸調査では、これを使ってクジラの体重を測定していますが、絶えず海水にさらされる上に常に動揺する船上という、機械にとってあまりに過酷な環境に耐えうるトラックスケールはありません。使用されている体重計は前述した30 t秤（最大秤量22 t）ですが、船体が動揺すればこの秤も動いてしまい、デジタル表示では値が激しく動いて読み辛くなるため、表示部はわざわざ針が振れるアナログタイプのもを使用しています（図13）。凧の時には体重測定は比較的容易に行えるのですが、時化やうねりの高い時の調査では、体重測定値の読みとりは難しくなり、その誤差も大きくなってしまいます。また船体の動揺は不規則なため、振幅の最大値と最小値の中間に位置する目盛りを読めば良い、という単純なものではなく、時化の時の測定値読みとりには経験と慣れが必要となります。さらには、この30 t秤の最小目盛

りは250kgですが、体重計測の際には、さらにその最小目盛りを目測で5等分して50kg単位で体重を測定しています。このように、船上で精度の良い重量データを得ることは難しく、誤差範囲も大きくなってしまいうことが問題点として挙げられます。ちなみにこの体重計は、毎調査開始前に母船が港に係留されて、動揺のない時に零点の較正を行っています。

上述した検査や部分検査では、脂皮や背肉、頭骨など大きなものの計測も行いますが、これには、デジタル無線式の3 t吊秤を使っています。大きなフックやワイヤーを肉や皮に通して吊り上げて1 kg単位で計測します(図14)。海況が良くて時間的にも余裕があり、更に非常に小型のミンククジラやクロミンククジラが捕獲された時には、体重計と3 t吊秤の計測値を比較するために、体重計による計測だけでなく、3 t吊秤で鯨体をまるのまま吊り上げて体重を計測する(通称、一本吊り)こともあります。

他に重量を計測しているものには、精巢及び精巢上体や胎児の体重、胃内容物があります。オス個体の成熟判定の指標となる精巢及び精巢上体の重量測定は、最大秤量6 kg(図15)あるいは150kgのアイスランド製の船舶用デジタル秤量計(会社名から、通称マレル)を使って行います。

胎児は、その体長が1 cm弱、体重1g以下の計測不能なものから、体長4 m、体重700kgを超えるのものまでと非常に大きな違いがあります。ですから、胎児の体重はその大きさに合わせた機器を用いて、それぞれの計量機器の最小計量単位で計測することになります。150kgのマレルに載せられない大きな胎児については、デジタル2 t吊秤で吊り上げて(小型成体の一本吊りの要領で)1 kg単位で計測しています。

胃内容物は、胃袋から容量が100 ℓのプラスチックタブに受け取り(図16)、それを前述の150kgのマレルで計測します(図17)。この胃内容物重量の測定は全鯨種、全個体で行っていますが、比較的小型のヒゲクジラであるミンククジラやクロミンククジラでも、多い時には第一胃だけで150~300kgの胃内容物が入っているため、何度もプラスチックタブに受けて計測するという、体力的に非常に厳しい調査項目です。さらに、近年の捕獲対象鯨の大型化により、胃内容物重量も格段に重くなり、特にナガスクジラでは、第一胃だけで文字通り桁違いの1トンにもなる胃内容物が入っていることがありました。こうなると、第一胃の内容物全てを計測するのに、単純に計算しても少なくとも11回は計測せねばならないことになり、さらに固形分重量を計測するために大きなザルで胃内容物を濾さねばならず、ここでも調査員は腰痛と闘いながら作業をすることになります。近年、この作業量の増大により、腰を痛める事故が後を絶たないため、測定方法の更なる改善が必要だと思っています。

## 4 . 終わりに

以上、調査母船日新丸上で行っている生物調査のうちの「測る」調査を紹介しました。捕獲調査が始まった頃に比べて、現在では捕獲数も格段に増加し、また捕獲対象鯨も大型化しているため、船上では安全かつ効率的に作業することが、これまで以上に要求されます。そのため、これらの「測る」調査も適宜改良が加えられ、現在に至っています。我々は今回紹介した「測る」調査以外にも、先の鯨研通信で紹介のあった脊椎骨やDNA分析用の組織の採集など、各種試料の採集や観察など、多くの作業を母船上で行っています。

このような大型クジラ類の調査ができるのは、世界中探してもこの捕獲調査だけです。この「鯨研通信」を読まれた方の中で、是非ともこの調査に臨時調査員として参加したいと思われた方は、当研究所に連絡して頂きたいと思います。



図 1 . ナガスクジラの体長計測風景。上顎先端から尾鰭分岐点までの直線距離を体長として計測しています。



図 2 . マッコウクジラの頭部を腹側面から撮影したもの。頭部先端が上顎先端よりも前方にあるのが分かります。



図 4 . 体長及び外部形態計測用の機材。



図 5 . 口蓋長（長径）の計測風景（クロミンククジラ）



図 6 . ヒゲ板列長の計測（ミンククジラ）



図 7 . 頭骨長（上）と最大幅（下）の計測風景（クロミンククジラ）



図 8 . ニタリクジラの子宮を甲板上に引き出しているところ。この子宮内には体長332.2cmの胎児が入っていました。

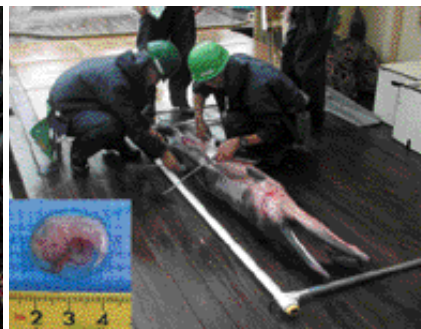


図 9 . 胎児の体長及びプロポーション計測風景（イワシクジラ）。左下枠内は、クロミンククジラの微小胎児。



図10．体側部の脂皮厚の計測風景（クロミンククジラ）



図11．左側乳腺の最大幅と厚さの計測風景（イワシクジラ）



図12．鯨体の体重計測風景（イワシクジラ）



図13．30t秤のアナログ計量部。これは秤量部から油圧ケーブルで繋がっています。



図14．組織重量の測定風景。クロミンククジラの左体側脂皮の重量を、3 t吊秤で吊り上げて計測しているところです。



図15．精巢の重量測定（クロミンククジラ）。精巢上体の重量もこの秤で行います。



図16．第1胃の内容物を100 ℓのプラスチックタブに受け取っているところ（ナガスクジラ）



図17．胃内容物の計量風景。左上の青い箱型のもが表示部。

## 日本鯨類研究所関連トピックス (2007年6月~8月)

## パステネ部長のチリのプンタアレナス訪問

5月20日から6月8日まで、パステネ研究部長が、チリ南極研究所の海洋生物グループの国際科学アドバイザーとして、チリのプンタアレナスを訪問した。訪問中、海洋生物グループがパタゴニア海峽で行っている鯨類の生物学的及び生態学的研究についての打合せ、ニタリクジラの生態と系群構造についての講演を行った。講演には約40名が参加した。

## 第54回ワシントン条約 (CITES) 常設委員会の開催

6月3日より15日の間、ハーグ (オランダ) において標記会議が開催された。鯨類関連では、鯨類の付属書掲載を科学的基準に基づいて見直す作業を求める日本の決定案が否決された。他方で、IWCでモラトリアムが設定されている間は動物委員会における鯨類の付属書掲載をいっさい行わないとする決定案 (豪州) が採択された。日鯨研からは、グッドマン囑託及び飯野情報・文化部次長が日本代表団に加わって参加した。

## 第59回IWC報告会の開催

5月28日から31日まで、米国アンカレッジで開催された第59回IWC年次会合の報告会が、6月21日から29日までの間、全国10市町 (札幌、釧路、仙台、石巻、東京、南房総、太地、名古屋、大阪、福岡) で開催され、水産庁担当官から結果報告がなされた。日鯨研からも役職員が同行し、捕獲調査の状況について報告した。

## 畑中理事長の退任及び森本理事長の就任

当研究所は6月14日に評議員会を開催し、平成16年1月29日以来約3年半理事長を務めた畑中寛氏の辞意を受け、IWC日本政府代表 (前財団法人海洋生物環境研究所理事長) の森本稔氏を理事として選任した。また、翌6月15日に理事会を開催し、森本稔理事を理事長として互選した。畑中前理事長は、当研究所の顧問に就任した。

## 第三勇新丸の進水式

目視採集船第一京丸の老朽化により、その代替船として建造された第三勇新丸の進水式が7月3日広島県の船舶瀬戸田ドックで挙行された。式典には、新理事長の森本IWC日本政府代表ご夫妻が参加して船名の命名と支綱切断を行い、無事に進水式を終了した。この他、研究所からは畑中前理事長及び藤瀬理事が参加した。なお、新船はその後、船内の艙装等を行い、今秋からの第二期南極海鯨類捕獲調査に参加する予定である。

## 全国鯨フォーラム2007 “食彩・感動いしのまき”

昨年第5回で終了した日本伝統捕鯨地域サミットを引き継ぐイベントとして、「捕鯨を守る全国自治体連絡協議会」と石巻市の主催により7月7及び8日に開催。市内各所で捕鯨と鯨に関するイベントが開催され、網走市、石巻市、南房総市、太地町の首長によるタウンミーティングでは地域捕鯨再開を求める石巻宣言が採択された。日鯨研からは、森本理事長、大隅顧問、飯野情報・文化部次長が参加した。

## 国際海事機関 (IMO) 第53回航行安全小委員会

7月23日より27日までの間、ロンドンにおいて標記会議が開催された。日本提案による「海上作業 (捕鯨を含む漁業活動、調査活動、特殊物質の運搬等) に従事する船舶を対象とする抗議行動における船員及び船舶航行の安全を確保するための行動規範」の作定を次回の同小委員会会合から開始することが了承された。日鯨研から飯野情報・文化部次長が日本代表団に加わって参加した。

## JARPNII目視調査船の入港

5月11日に宮城県塩釜港を出港し、北西太平洋で鯨類目視調査に従事した第二共新丸は、83日間の全航程を終えて、8月1日、宮城県塩釜港に入港した。



パステネ研究部長のポルトガル、ガボン及びサントメ・プリンシペ訪問

8月2日から11日まで、パステネ研究部長が、日本代表団の一員として、ポルトガル、ガボン及びサントメ・プリンシペを訪問した。3日にはポルトガル・リスボンの日本大使館で、「国際捕鯨委員会（IWC）と日本の捕獲調査」について講演した。日本大使館からは大使を含む3名が、ポルトガル政府の環境省からは2名が参加し、建設的な質疑応答、議論が行われた。7日にはサントメ・プリンシペの国会議事堂で「国際捕鯨委員会（IWC）と日本の捕獲調査」について講演した。日本代表団、ガボン日本大使館の大使、サントメ・プリンシペの大臣、国会議員、NGOメンバーを含む約40人が参加し、建設的な質疑応答、議論が行われた。

鯨類捕獲調査母船「日新丸」における死亡事故の発生

8月5日に北西太平洋鯨類捕獲調査に従事していた日新丸の船内で、副産物の包装容器の整理作業中に赤城政典製造員が昇降機に挟まれる事故が発生した。日新丸は急速日本に向け航行開始したが、搬送中に同氏の死去が船医により確認された。ご遺体は釧路港からご実家の小田原市に移送され、葬儀が営まれた。日新丸は、同港にて海上保安部による現場検証、事情聴取などを受けた後、8月10日再出港して調査活動を再開した。

JARPNII調査船団入港

5月9日より北西太平洋鯨類捕獲調査に従事していた6隻の調査船のうち、調査母船日新丸と目視採集船3隻は、8月12日に予定された調査活動を終了して、先の目視専門船第二共新丸に次いで、目視採集船3隻は8月17日に下関サイセイドックへ、日新丸は8月18日に石巻港へ、それぞれ帰港した。今次調査では、ミンククジラ100頭、ニタリクジラ50頭、イワシクジラ100頭及びマッコウクジラ3頭を採集して生物調査を実施し、データや標本の収集が行われた。調査母船日新丸の入港式には、水産庁から成子遠洋課長、石巻市から千葉副市長が参加し、調査航海中に不慮の事故で亡くなった赤城政典製造員への黙祷を捧げたのち、調査船乗組員の労をねぎらった。

また、同JARPNIIの鯨類餌環境調査を担当する海幸丸は、7月4日塩釜港を出港して、トロール網や計量魚探を用いた鯨類餌環境調査並びに目視調査に従事しており、9月上旬に沖合域調査を終了して、釧路に帰港する予定である。同船はその後JARPNIIの沿岸域調査に引き続き参加する。

霞ヶ関子ども見学デーへの参加

8月22及び23日の2日間にわたり、各官公庁で子ども霞ヶ関見学デーが例年通り開催され、農林水産省本館8階の中央会議室において水産庁のイベントが実施された。当研究所からは、「くじらをもっと知ろう！」というテーマに基づいて、日本近海に生息する鯨類及び世界の鯨類ポスター、クロミンククジラの胸鱗の骨格、ひげ板、耳垢栓、ハクジラの歯等の標本や鯨類捕獲調査の流れを分かりやすく紹介するパネルを展示した。クジラの利用方法について学んでもらうために、ビデオ上映、マッコウクジラの脳油、竜涎香、クジラの歯やひげ板を原料とした工芸品を展示するほか、調査副産物である鯨肉の缶詰、鯨カレーや鯨シチューなどの加工品、鯨肉の栄養価等の食に関するパネルを展示し、鯨料理の作り方やレシピも紹介した。そのほか、鯨と捕鯨の科学知識や歴史について学べる「クジラ3択クイズ」コーナー、クジラの聴覚体験コーナーをつくった。絵本コーナー、塗り絵コーナー、ペーパークラフトコーナー等でも、楽しそうに学んでいる子ども達の姿が見うけられた。

## 日本鯨類研究所関連出版物情報（2007年6月～8月）

### 【印刷物（研究報告）】

Kaori Onbe, Shin Nishida, Emi Sone, Naohisa Kanda, Mutsuo Goto, Luis A. Pastene, Shinsuke Tanabe, and Hiroko Koike : Sequence Variation in the *Tbx4* Gene in Marine Mammals . *Zoological Science* . 24(5) . Zoological Society of Japan . 449-464 . 2007/5

Shin Nishida, Mutsuo Goto, Luis A. Pastene, Naohisa Kanda, and Hiroko Koike : Phylogenetic Relationships Among Cetaceans Revealed by Y-Chromosome Sequences . *Zoological Science* . 24(7) . Zoological Society of Japan . 723-732 . 2007/7

## 【第59回IWC科学委員会関係会議提出文書】

- Acevedo, J., Olavarria, C., Plana, J., Cortes., D., Aguayo-Lobo, A. and Pastene, L.A.: Dwarf minke whale (*Balaenoptera acutorostrata*) in Antarctic Areas I and II. SC/59/IA24. 8pp.
- Butterworth, D S and Mori, M.: On the compatibility of results from ADAPT-VPA and transition-phase-based trends in age-at-maturity for the I-stock of Antarctic minke whales. SC/59/IA22. 5pp.
- Branch, T.A., Stafford, K.M., Palacios, D.M., Allison, C., Bannister, J.L., Burton, C.L.K., Cabrera, E., Carlson, C.A., Galletti Vernazzani, B., Gill, P.C., Hucke-Gaete, R., Jenner, K.C.S., Jenner, Mn. M., Matsuoka, K., Mikhalev, Y.A., Miyashita, T., Morrice, M.G., Nishiwaki, S., Sturrock, V.J., Tormosov, D., Anderson, R.C., Baker, A.N., Best, P.B., Borsa, P., Brownell Jr, R.L., Childerhouse, S., Findlay, K.P., Gerrodette, T., Ilangakoon, A.D., Joergensen, M., Kahn, B., Ljungblad, D.K., Maughan, B., Mccauley, R.D., Mckay, S., Norris, T.F., Oman Whale and Dolphin Research Group, Rankin, S., Samaran, F., Thiele, D., Van Waerebeek, K. and Warneke, R.M.: Past and present distribution, densities and movements of blue whales in the Southern Hemisphere and adjacent waters. *Mammal Rev.* SC/59/ForInfo26. 43pp.
- Cooke, J.G., Baker, C.S., Butterworth, D.S., Kato, H., Pastene, L., Walloe, L. and Brownell, R.L.: Sources of information for a Comprehensive Assessment of North Pacific sei whales. SC/59/IA17. 5pp.
- Cooke, J.G., Best, P.B., Butterworth, D.S., Gunnlaugsson, Th., Hatanaka, H., Polacheck, T., Punt, A.E., Schweder, T., Tanaka, E. and Wade, P.R.: Provisional compilation of information for the MSYR review. SC/59/RMP9. 24pp.
- Goto, M., Park, J.Y., Kanda, N., Shon, H., Kim, Z.G., and Psutene, L.A.: Progress of genetic analysis of by-caught J-stock minke whales from Japan and Korea: seasonal pattern of migration. SC/59/NMP6. 9pp.
- Goto, M., Kato, H., Zenitani, R., Yoshida, H., Saito, T., Tabata, S., Morita, Y., Sato, H., Okamoto, R., Maeda, H., Odagawa, A., Ebisui, T., Nakai, K., Matsumoto, A., Fujimori, S., Nishiwaki, S. and Kawahara, S.: Cruise report of the second phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Western North Pacific (JARPN II) in 2006 - Coastal component off Sanriku. SC/59/O6. 34pp.
- Government of Japan (Compiled by Fujise, Y., Pastene, L.A., Hatanaka, H., Ohsumi, S. and Miyashita, T.): Evaluation of 2005/06 and 2006/07 feasibility study of the Second Phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Antarctic (JARPA II). SC/59/O3. 23pp.
- Hakamada, T., Matsuoka, K. and Nishiwaki, S.: Improvements of the JARPA abundance estimation of Antarctic minke whales based on JARPA Review Meeting recommendations. SC/59/IA11. 24pp.
- Kato, H., Matsuoka, K., Nishiwaki, S. and Bannister, J.: Distributions and abundances of pygmy blue whales and southern right whales in waters off southern coast of Australia, based on data from the Japan/IWC blue whale cruise 1995-96\*. SC/59/SH10. 14pp.
- Kato, H., Ishikawa, H., Goto, M., Miyashita, T. and Moronuki, H.: Status report of conservation and researches on the western Gray whales in Japan, June 2006-April 2007. SC/59/O18. 10pp.
- Kawahara, H. and Hatanaka, H.: Concept of the ecosystem models developed in JARPN II Program. SC/59/O11. 6pp.
- Kitakado, T., Pastene, L.A., Goto, M. and Kanda, N.: Updates of stock structure analyses of B-C-B stock of bowhead whales using microsatellites. SC/59/BRG30. 13pp.
- Konishi, K., Tamura, T., Zenitani, R., Bando, T., Kato, H. and Walloe, L.: Decline in energy storage in the Antarctic minke whale (*Balaenoptera bonaerensis*) in the Southern Ocean using JARPA data. SC/59/O10. 10pp.
- LeDuc, R.G., Dizon, A.E., Goto, M., Pastene, L.A., Kato, H., Nishiwaki, S. and Brownell, R.L. Jr.: Patterns of genetic variation in southern hemisphere blue whales, and the use of assignment test to detect mixing on the feeding grounds. In press: *J. Cetacean Res. Manage.* SC/59/ForInfo53. 12pp.
- Murase, H. and Kitakado, T., Matsuoka, K., Nishiwaki, S. and Naganobu, M.: Exploration of GAM based abundance estimation method of Antarctic minke whales to take into account environmental effects: A case study in the Ross Sea. SC/59/IA12. 13pp.
- Mori, M., Butterworth, D. and Kitakado, T.: Further progress on application of adapt-VPA to Antarctic minke whales. SC/59/IA13. 32pp.
- Mori, M. and Hakamada, T.: Some initial progress on the ecosystem modelling of the JARPN II survey area using Ecopath-with-Ecosim. SC/59/O13. 11pp.
- Nishiwaki, S., Ogawa, T., Matsuoka, K., Mogoe, T., Kiwada, H., Konishi, K., Kanda, N., Yoshida, T., Wada, A., Mori, M., Osawa, T., Kumagai, S., Oshima, T., Kimura, K., Yoshimura, I., Sasaki, T., Aki, M., Matsushita, Y., Ito, H., Sudo, S. and Nakamura, G.: Cruise report of the second phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Antarctic(JARPA II) in 2006/2007 -Feasibility study-. SC/59/O4. 23pp.

## 第435号 2007年9月

- Ohsumi, S., Goto, M. and Otani, S.: Necessity of combining lethal and non-lethal methods for whale population research and their application in JARPA. SC/59/O2. 7pp.
- Pastene, L.A., Kawahara, S. and Hatanaka, H.: Concepts for a Research program on North Pacific Bryde's whale -RMP Variant 2 with research-. SC/59/PFI2. 5pp.
- Pastene, L.A., Kitakado, T., Goto, M. and Kanda, N.: Update of mitochondrial DNA analyses on stock structure in the B-C-B stock of Bowhead whale. SC/59/BRG29. 12pp.
- Tamura, T. and Konishi, K.: Additional analysis of stomach contents weight of the Antarctic minke whale *Balaenoptera bonaerensis* in the Southern Ocean. SC/59/O9. 7pp.
- Tamura, T., Matsuoka, K., Bando, T., Mogoe, T., Konishi, K., Mori, M., Tsunekawa, M., Okamoto, K., Funasaka, N., Sakajiri, H., Yoshida, Y., Kumagai, S., Kimura, K., Takamatsu, T., Konagai, T., Sasaki, S., Kuwaoka, J. and Ogawa T.: Cruise Report of the second phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Western North Pacific (JARPN II) in 2006 (part I) - Offshore component - Cruise report of the Second Phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Western North Pacific (JARPN II) in 2006 (part I) - Offshore component. SC/59/O5. 26pp.
- Yoshida, H., Kato, H., Kishiro, T., Miyashita, T., Iwasaki, T., Minamikawa, S., Ryono, T., Tabata, S., Morita, Y., Sato, H., Okamoto, R., Toyoda, Y., Nakamura, G., Ebisui, T., Nakai, K., Matsumoto, A., Nishiwaki, S. and Kawahara, S.: Cruise report of the second phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Western North Pacific (JARPN II) in 2006 - Coastal component off Kushiro. SC/59/O7. 43pp.
- Zenitani, R., Kishiro, T., Hakamada, T. And Kato, H.: Current status and future plan of age reading by earplugs in baleen whales under the scientific permits, with note on age reading of Antarctic minke whales. SC/59/O8. 8pp.

### 【印刷物（雑誌新聞・ほか）】

- 当研究所：鯨研通信 . 434 . 日本鯨類研究所 . 20pp . 2007/6
- 当研究所：ポスター「日本近海にいる鯨類（Cetaceans around Japan）」. 第3版 . 日本鯨類研究所 . 2007/7
- 当研究所：世界の鯨類 - （Cetaceans around the world）ヒゲクジラのなかま（Baleen whales/ *Mysticeti*）. 日本鯨類研究所 . 2007/7
- 当研究所：世界の鯨類 - （Cetaceans around the world）ハクジラのなかま（Toothed whales/ *Odontoceti*）. 日本鯨類研究所 . 2007/7
- 当研究所：DVD「はじめての鯨料理」. 日本鯨類研究所・日本捕鯨協会 . 2007/7
- 当研究所：（広告）クジラは、日本の食文化 おいしい鯨。くじらも食べていい海の幸 クジラは増えています。水産タイムス . 日本捕鯨協会・日本鯨類研究所 . 2007/7/16
- 当研究所：カンタン！おいしい！クジラ料理 レシピ20選 . 日本鯨類研究所 . 20pp . 2007/7/16
- 当研究所：捕鯨をとりまくこの1年 2007年（前期）. 日本鯨類研究所 . 51pp . 2007/8
- 当研究所：水産資源管理談話会報 . 40 . 日本鯨類研究所 資源管理研究センター . 37pp . 2007/8
- 当研究所：クジラの調査はなぜやるの？ . 第6版 . 日本鯨類研究所 . 10pp . 2007/8/28
- 後藤睦夫：遺伝的解析に基づくナガスクジラの海洋間の系統関係 . 鯨研通信 . 434 . 日本鯨類研究所 . 1-8 . 2007/6
- 後藤睦夫：第58回IWC科学委員会報告 . 水産資源管理談話会報 . 40 . 日本鯨類研究所 資源管理研究センター . 5-8 . 2007/8
- 石川 創：調査捕鯨妨害するテロ団体 . 週刊世界と日本 . 2007/6/18
- 木和田広司：日本鯨類研究所が進めている調査手法の紹介（ ） - 鯨類捕獲調査情報収集装置 - . 鯨研通信 . 434 . 日本鯨類研究所 . 9 17 . 2007/6
- Seiji Ohsumi : Research needed on dolphin meat . Japan Times . 2007/8/15
- Luis A. Pastene : REPORT OF THE 57TH MEETING OF THE INTERNATIONAL WHALING COMMISSION'S SCIENTIFIC COMMITTEE . 水産資源管理談話会報 . 40 . 日本鯨類研究所 資源管理研究センター . 1-4 . 2007/8

### 【放送・講演】

- 藤瀬良弘：ウェークアップ！ぶらす . 日本テレビ（読売テレビ）. 2007/6/23
- 藤瀬良弘：第59回IWC年次会合報告会 . 南房総市役所 . 千葉県 . 和田コミュニティーセンター . 2007/6/27
- 後藤睦夫：クジラ博士の出張授業 . 石巻市立蛇田小学校 . 宮城県 . 2007/6/20
- 後藤睦夫：クジラ博士の出張授業 . 石巻市立雄勝小学校 . 宮城県 . 2007/6/20
- 後藤睦夫：クジラ博士の出張授業 . 石巻市立向陽小学校 . 宮城県 . 2007/6/21

- 後藤陸夫：クジラ博士の出張授業。石巻市立鮎川小学校。宮城県。2007/6/21
- 畑中 寛：第59回IWC年次会合報告会。「関東・甲信越」捕鯨を守る会。東京都。中央魚類学会議室2F。2007/6/21
- 畑中 寛：鯨類の資源状況と国際政治。9日会。東京都。プレスセンタービル。2007/7/25
- 石川 創：クジラ博士の出張授業。香川県歴史博物館。香川県。2007/7/29
- 石川 創：CUBEスペシャル 鯨を食べていたことを知っていますか ~捕鯨ウォーズ~。テレビ西日本。2007/8/25
- 上田真久：CUBEスペシャル 鯨を食べていたことを知っていますか ~捕鯨ウォーズ~。テレビ西日本。2007/8/25
- 森本 稔：ウェークアップ! ぶらす。日本テレビ(読売テレビ制作)。2007/6/23
- 中山博文：第59回IWC年次会合報告会。東海・北陸捕鯨を守る会。愛知県。名古屋市中部水産学会議室3F。2007/6/22
- 中山博文：第59回IWC年次会合報告会。太地町役場。和歌山県。太地町公民館。2007/6/22
- 西脇茂利：ネイチャースクールわくわくWADA“くじら学”。千葉県南房総市。2007/7/15-17
- 西脇茂利：鯨山に登り、人山を眺める。ウーマンズフォーラム魚“海と魚と食文化講座”小泉塾 ~クジラから世界が見える~。東京都。全日本海員組合 大会議室。2007/8/4
- 大曲佳世：世界のクジラ利用。海洋大学 第3回 海洋文化フォーラム。東京都。海洋大学品川キャンパス。2007/6/13
- 大隅清治：めざましテレビ。フジテレビ。2006/6/4
- 大隅清治：横浜市長・中田宏のDREAM RUMMER。ニッポン放送。2007/6/25
- 大隅清治：第59回IWC年次会合報告会。北海道捕鯨を守る会。北海道札幌市。曲メ高橋水産学会議室4F。2007/6/28
- 大隅清治：第59回IWC年次会合報告会。釧路市役所。北海道釧路市。くしろ水産センター3F会議室。2007/6/29
- 大隅清治：トコトンハテナ・なんで鯨の肉が売っているの。テレビ東京。2007/7/1
- 大隅清治：横浜市長・中田宏のDREAM RUMMER。ニッポン放送。2007/7/2
- 大隅清治：全国鯨フォーラム2007いしのみまき クジラ博士の出張授業。河北総合センタービックバン。宮城県石巻市。2007/7/7
- 大隅清治：恵比寿としてのクジラ - 鯨類利用の過去、現在そして将来。かわさき市民アカデミー自然科学コース。神奈川県川崎市。川崎市生涯学習センター。2007/7/18
- 大谷博美：第59回IWC年次会合報告会。東北捕鯨を守る会。宮城県仙台市。卸町会館3F第一会議室。2007/6/22
- 大谷博美：第59回IWC年次会合報告会。石巻市役所。宮城県石巻市。牡鹿公民館。2007/6/23
- Luis A. Pastene：‘ The International Whaling Commission (IWC) and the Japanese Whale Research under Special Permit ’ (in English)。Japanese Embassy in Lisbon。Portugal。2007/8/3
- Luis A. Pastene：‘ The International Whaling Commission (IWC) and the Japanese Whale Research under Special Permit ’ (in Spanish)。San Tome and Principe's Congress。San Tome and Principe's。2007/8/7
- 勢登啓三：第59回IWC年次会合報告会。関西捕鯨を守る会。大阪府大阪市。中央卸売市場管理棟会議室13F。2007/6/25
- 勢登啓三：第59回IWC年次会合報告会。九州・山口鯨協議会。福岡県福岡市。中央卸売市場鮮魚会館会議室2F。2007/6/26
- 田村 力：クジラ博士の出張授業。宮崎大学教育文化学部附属小学校。宮崎県。2007/6/10
- 田村 力：ハイビジョン特集「菅原文太が行く 人とクジラのたどった道」(再放送)。BS-Hi。2007/6/19
- 田村 力：ムーブ2007「海が変だ~九州近海が亜熱帯化の兆し~」。RKB毎日。2007/6/24
- 田村 力：CUBEスペシャル 鯨を食べていたことを知っていますか ~捕鯨ウォーズ~。テレビ西日本。2007/8/25

## 京きな魚（編集後記）

南極海での火災事故に続き、調査母船日新丸で発生した死亡事故をまた記事に掲載しなければならないのは沈痛の極みである。お亡くなりになった乗組員のご冥福をお祈りするとともに、同じ捕獲調査の現場で働く者として、二度とこのような事故が発生しないよう安全の徹底に努めなければならないと改めて思う。(石川)